

## 5. 下刈り指針

### 5.1. 目的

植樹木の生育条件である日照を確保するため、草本や灌木、つる類を除去する。特につるは、植樹木に巻きつき、頭にかぶり披圧するので重点的に除去。植樹木が草から頭を出せば終了。植樹木の生長の具合で異なるが概ね3～4年程度。その後はクズを重点につるの切り。以降侵入する木本とは共生を期待して育樹。できるだけ人手をかけない、自然淘汰型の広葉樹林の造成を目標とする。

### 5.2. 下刈り方法

全刈りを採用するが、あまり潔癖に除草しない。省力のため一部筋刈り、坪刈りも可。相対照度30%程度では枯損せず、むしろ乾燥防止にプラス効果があることを考慮。植樹木に覆い被さるように繁茂する草本類及びつる類は徹底除去。クズ密生地では、根系ごとに枯刹するため、薬剤（ラウンドアップ）による注入処理を行う。

### 5.3. 事前確認

篠竹で明示されていない植樹は、明示する。（枯死した場合も下刈り終了までは篠竹は残置する）

灌木などから植樹木を見分けられるよう、ラベル、テープ、スプレーで目印をつける。事前に作業路の補修を行うことが作業の安全、効率の向上に重要。

### 5.4. 下刈りの実行

植樹樹種一覧表や配置図で、下刈り実行個所の樹種と植樹位置を確認する。広葉樹の幼樹は、まわりの灌木と紛らわしいので、誤伐しないよう特に気をつける。そのためにも下刈りがまは大振りしない。手がま推奨。倒れ又は斜上した植樹木は、篠竹を支柱にして起こす。乾燥等で上部が枯れても、根は生きていて下部から芽が吹いている場合があるので注意。絡まったつるは元を切れれば枯死するので、ほどく必要はないが、つるの荷重で引き倒れの恐れがある場合はほどく。

### 5.5. 道具

手がま、下刈りがま、地ごしらえがま、なた、剪定ばさみ、ラウンドアップ、テープ類、篠竹、作業補修用具  
刈り払い機は、人的体制ができてくれば部分導入を検討する。

#### 5. 6. 作業計画

下刈り計画の作成。班ごとの作業地域配分。

5月：設計、事前準備      6月 7月 8月：下刈り作業

#### 5. 7. 注意事項

植樹ユニットごとの生育本数、枯死状況等をカウント、確認する。